
ぬらりひよんの孫～首無と毛倡妓の恋物語～

生時(レジェンド)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぬらりひよんの孫〜首無と毛倡妓の恋物語〜

【コード】

N4654Q

【作者名】

生時
レシホン
下

【あらすじ】

「ぬらりひよんの孫」の女性キャラで毛倡妓が一番好きだから、首無とのちよっとした恋物語を書いてみました。

250年前……

一人の義賊の男と、紀乃との言う名の吉原の花魁が「ある事件」をきっかけに人から妖になった。

男は首無、女は毛倡妓という妖に……

京都での戦いが終わり、「鵜」との戦いが始まるまで、奴良組の妖怪はしばし、平穏な生活を送っていた。

ある日毛倡妓は首無を強引に連れて、散歩に出かけた。

首無はその名の通り首が無いため、街を歩く時はマフラーをして歩く。

人間から自分が妖怪だと気づかれなかったためにするためだ。

「おい毛倡妓、もうすぐ日が暮れる。夕食の仕度はいいのか？」

「今日は雪女たちに任せてあるから大丈夫だよ」

今日の彼女すごくご機嫌だった。

「やれやれ」

そう言いながらも彼女に付き合う首無。

しばらく歩いていると、一人の女学生が3人の不良に絡まれていた。

「ちょっと付き合ってくれよ」

「私急いでいるのです」

そんな彼女の言葉を不良たちは聞き流し、彼女の体に触れた。

「かわいいね」

「いや」

「嫌がつているだろう。やめてやりな」

首無はそう言って、彼女を助けに入った。

「何だお前？」

そう言つて、不良の一人が首無を殴ろうとした。

「仕方がないな」

そう言つたと首無は持っていた紐をムチのように攻撃し、不良たちを懲らしめた。

「クソ！」

「まだやるか？これ以上は手加減しないぞ」

「うっ……」

首無の言葉に不良たちは首無しに畏れを感じ、悔しい顔をして3人は去っていった。

「大丈夫？」

「は、はい」

女子は顔を赤くして答えた。

「毛倡妓、俺はこの子を家まで送るから、先に帰ってくれ」

「なっ……」

ご機嫌だった毛倡妓の顔が険しくなった。

「そうかい。ホント首無あんたは女にあまいんだから」

「さあ、また襲われるといけないから、私が貴女の家まで送りますよ」

「は、はい。ありがとうございます」

首無は女子学生を家まで送るため、毛倡妓の前から去っていった。

「（今日は特別な日だから一緒にいてほしかったのに）」

首無が去ってから、間もなくすると、一人の少年が彼女を呼んだ。

「毛倡妓」

「リクオ様！」

この少年こそが、ぬらりひよんの孫で、京妖怪との戦いの後、若頭から奴良組の三代目総大将となった、奴良リクオだ。

だが、彼は四分の一しか妖怪の血を受け継いでいないため、普段は

人間で、普通の中学生の姿をしていた。
そして彼の側には、リクオの幼き頃から側近、雪女の氷麗こほろもいた。
二人は学校からの帰りだったのだ。

「今日は首無とお出かけじゃなかったのですか？」
と、つららが問いかけた。

「いいのよ。あんな奴。それより夕食の仕度をしに先に戻るわ」
「いいの？今日は私たちに任せたんじゃないの？」
「いいの」

彼女はそう言って、屋敷に帰っていった。

「首無となんかあったのかな」後で首無に聞いてみようかな
「リクオ様、人の恋路を邪魔してはいけません」

「……そ、そうだね。よけいな事しないほうがいいよね」
「そうです。二人の問題は二人で解決させた方がいいのです」

その夜、首無は夕食の時間になっても帰ってこなかった。
毛倡妓は夕食後、一人夜の散歩に出かけた。

「どうせ今頃、あの女の子と仲良くなって、食事でも一緒に食べて
いるんだわ」

彼女は独り言を言いながら、小さな公園にやって来た。
そして、ブランコに座り、ため息をはいた。

しばらくすると首無が彼女に気づき、手を振りながら近寄った。
だが毛倡妓は首無と目を合わさなかった。

「今日だけは二人だけでいたかったのに」
そう言って彼女は鋭く睨んだ。

「すまない。お前に何を買って渡そうか悩んでいたら、遅くなって

しまった」

そう言いながら首無は買った物を彼女に渡した。

「首無、これは？」

彼が渡したのは手鏡だ。

「いろいろと悩んで、手鏡を渡す事に決めただ。何しろ今日は義賊と紀乃が出会った日だからね。だから何か渡したくて」

「覚えていてくれたんだ」

「当たり前さ。250年前のこの日、まだ8歳だった紀乃と出会ったこと、昨日のように覚えている」

嬉しさのあまり、紀乃の目から涙が流れた。

「ありがとう。義賊さん」

二人は同時にクスツと笑った。

「もう少し夜の街を散歩しないか？」

「うん」

紀乃は首無に寄り添い、二人は歩き始めた。

「見付けた。あいつだ」

「ああ、あの野郎今度は違う女と」

「後ろから7人で襲い掛かるう」

そう話していたのは、昼間、首無に懲らしめられた不良たちだった。

4人仲間を増やし、首無を襲うつもりだ。
だが、

「人の恋路を邪魔しちゃういけねいな」

と、どこからか聞こえた。

そして不良たちが後ろを振り向くと、銀髪で長い髪を横に立て、鋭い眼光をした男が立っていた。

この男こそ、妖怪の姿の時のリクオだ。

「だ、誰だ！てめ〜」

不良の一人がリクオに攻撃を仕掛けた。

だが、リクオは鋭く睨み、不良たちはリクオに畏れを抱いた。

「このまま去って、これからはおとなしくする事だな」

「うっ……何だコイツは……」

「いいか、今度俺のシマで変なことをしていたら、その時は」

リクオは薄ら笑い、京での戦いで祢々切丸という妖刀は折れてしまったため、代わりの護身用の刀を抜いた。

「容赦なく叩き斬る」

リクオのその言葉に不良たちは慌てて逃げていった。

リクオの存在を首無も毛倡妓も気づいていたが、二人は心の中でリクオに感謝し、そのまま歩み続けた。

「月が綺麗だな」

そう言いながらリクオは、刀を鞘に納め、一人夜の闇へと消えていった。

(後書き)

どうも生時です^^

今回は椎橋先生の作品「ぬらりひよんの孫」の2次創作を書いてみました。

「ぬら孫」の女性キャラで一番好きなのは毛倡妓です。

そのため「ぬらりひよんの孫」の小説第3弾、「京都夢幻夜話」を買ってしまいました！！

是非お勧めですので読んでない方は、読んでみてください。

男性のキャラだと夜のリクオが一番好きです(もちろん首無も好きです)

そのため最後の方で登場させました。

ではご愛読ありがとうございます！

平成23年1月 生時

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4654q/>

ぬらりひよんの孫～首無と毛倡妓の恋物語～

2011年2月27日11時40分発行